

2006年チョンジュMBC国際ロードレース参加報告

監督 折本 裕 樹



今年のチョンジュMBC国際ステージロードレース（ツアー・ド・韓国）は6月8日～16日まで隣国の大韓民国を舞台にして開催された。このレースはエリート ツール・ド・韓国のジュニア版として韓国MBCテレビがメインスポンサーとなり、MBCテレビの各支局または市庁舎前が出发点となって市街地を抜け、風光明媚な海岸線を走るコース更には山岳コース、平坦クリテリウムを取り混ぜた本格的なステージレースでありロードレースの醍醐味を堪能できるレースである。出発日近くになって日程や航空便の変更等があり対応に追われた大会であったが、何といても本年の大きな特徴はJCFジュニアナショナルチーム6名に加えて、ジュニアの大多数を担う高体連から自費参加ながら代表1チームを参加させ、計2チームでの参加であったことであった。更に昨年まで7ステージの大会が本年は9ステージにアップされ、日本ジュニア選手にとって過酷な要件が加味された。しかし、これは一人でも多くの選手に海外ステージレースを経験させることにより日本ジュニア層の中長距離選手をレベルアップさせることが目指され、少数スタッフ、通訳やメカニック無しで海外にて経験と技量アップを図り、選手・スタッフともに日本での自転車競技の普及・発展のために、様々な還元を目的とされるものであった。日頃と全く違う環境下にて「毎日がレース」、「海外での食事」、「言葉の壁による意志疎通の難しさ」といった日本人特有の三大苦難を乗り越え、いち早く環境に対応して適応することが日本人選手の海外で活躍する大きな鍵であることには間違いはない。将来的には参加選手の中から日本中長距離界を担う選手が輩出されることを願いたい。また、大会もUCI規則に則りながら、特別ルールを採用など臨機応変の対応であり、技量の高い少数審判団によるレース運営は安全性を優先させながら道路を片側のみ規制し、1時間前からスタート付近の施設設営、前日の表彰をスタート時刻の

10分前に行い、ゴール付近の設営はスタッフが先回りし、ゴールをするおそらく20分前に設営する。リザルトは翌日でないとおそらく合理的な運営は感動する。ゴール後には約30分では関係者全員が撤収し、ゴール地点や道路規制も短時間で済む。ほぼ全員が競技経験者によつての大会競技・運営はぜひ日本も見習うべきであると感じた。そして、先の見えない日々の期間中の生活は同行スタッフも選手以上に肉体的・精神的なタフさを要求されるが参加した諸外国の選手団も同様であり選手・スタッフにとつてもこの大会への参加はロード競技を目指す上で登竜門的な位置づけとなると確信している。

6月8日 第1ステージ Cheong Ju → Jeon Ju
107.5KM

「伊藤まさかの不運な落車」

ジュニアチームのエース伊藤雅和（神奈川：法政二高）がスタート直後5分で右折時に路面の凹凸にハンドルを取られ、バランスを失い落車。顔面から路面にたたきつけられ、唇を5針縫うケガに見舞われた。コース試走ができず、情報が少ない状況でのレースはまさにサバイバル状態であった。前日にプログラムを熟知させ、スピードメーターを頼りに走る戦いが始まった。ゴールスプリントでの位置取りと仕掛けタイミングが選手たちには難しく、19名での先頭集団で高体連選抜チームの内間康平（沖縄：北中城高）が5位、初山（神奈川：麻溝台高）が7位、ジュニアチーム竹之内悠（京都：立命館宇治高）が14位であった。終了後、実際の走行距離がスタートと違うなど選手からは不満ももれた。

6月9日 第2ステージ Jeon Ju → Gwang Ju
99.0KM

前日、負傷した伊藤も一時緊急帰国も余儀なくされたが思ったほか回復が早く30分のタイムペナルティーで走行を許可していただいた。本人としては悔しさ

で一杯の様子であり、精神的なショックから早く立ち直って欲しいものである。コースは前日より短く、ほぼ平坦路、日本人はジュニアチーム・高体連チームともに果敢なアタックを仕掛け、積極的に責めるがカザフスタン・韓国チームの追撃はなかなかかわせない。結果的にゴールスプリントに持ち込まれ、寺垣慎太郎（富山：氷見高）10位、内間康平11位、竹之内悠13位、松井響（京都：北桑田高）14位であった。集団から大きく離脱する日本人選手はおらず、力的には互角かそれ以上である。

6月10日 第3ステージ Gwang Ju → Gwang Yang 90.2KM

レースは毎日、予定通りの9:30をスタートした。ゴール後に次のスタート地点まで移動し、宿泊する。日本選手団は調理器具と食材を買込み、朝、夕は部屋での自炊生活である。自費参加ながらの献身的なスタッフの行動には大変頭が下がる。スタッフ全員がメカニック・コーチ、そして食事を担当する。17名分の食事を作るには食材の購入から調理まで大変な労力を要する。

結果は相変わらず調子の良い、内間康平が4位、吉田隼人（奈良：榛生昇陽）10位、竹之内悠22位であった。選手持参の軽量コンポジットリムは、速いスピードで凹凸のある路面を駆け抜けると衝撃や振動で破損が目立った。スペアホールを両チーム合わせ10本持参したが先が心配であった。

6月11日 第4ステージ Gwang Yang → Ma San 103.5KM

「石倉無念のゴール前落車」

大学生ジュニア参加選手は石倉龍二（和歌山：日本大学）、鶴川大輝（香川：立命館大）であるが、進学後の環境の変化等でほとんどの選手が力を落としてしまう。その中で一番走っている石倉がゴール100m先頭にいながら他の選手と接触し落車。右ひじを5針縫う裂傷、左足打撲傷で病院に搬送された。初日に落車の伊藤についてもレントゲン等検査を受け夕方には宿舎へ同行スタッフとともに戻った。痛みを訴えていたが本人達の強い希望で翌日もレースを続行させた。レースは平坦路90名のゴール勝負で寺垣慎太郎13位、内間康平15位、越海誠一（大分：別府商業）が30位であった。韓国選手団は特に下りのスピードが速く、のぼりで離しても下りで追いつかれてしまう状態が続く。第4ステージ終了時の個人総合であるが内間康平がトップと14秒差の総合5位、竹之内悠が29秒差10位、団体では高体連代表チームが2位、ジュニアナショナルチームは8位であった。この結果は前年度11月までの実績で06年選手ジュニア指定を推薦して、そこから選考されたJCFジュニアチーム、選考にこぼれながら3月、4月に力をつけてきた高体連選抜チーム、こ

れほど成長著しいジュニア層の中長距離の指定時期に関しては次年度に向けて改善しなければならない。2チームの参加は諸外国選手との戦いと日本人同士で7月参加予定されているツールドラビティをはじめ各種大会の選考争いも兼ねた2重の戦いは追撃する高体連選手の前動力であったと感じる。

6月12日 第5ステージ Chang Won → Ul San 83.8KM

「日本待望の初メダル、内間の勢いはとまらない」
今回初の山岳を多く含むコース、残り約8kmが上りでゴールという設定。日本選手団はもともとCSCを始めとする山岳コースで優秀な選手が多く含まれるため期待が持てる。上りに入るまで数名の逃げを許していたが上りに入るとゴールまでの距離を計算し、再度、逃げをうった10名の集団に内間・吉田が含まれているという無線を開き期待が膨らんだ。ゴール数キロで韓国選手が集団を振り切ったが、2位争いの勝負で内間が抜け出し2位、集団勝負で吉田が4位と大健闘した。個人総合で内間が3位、初山が4位、竹之内8位、吉田9位と徐々に順位をあげ、団体に高体連選抜1位、JCFジュニアチーム4位と順位を上げた。

6月13日 第6ステージ Ul San Criterium 46.4KM

クリテリウムも得意不得意がはっきりしており右回り、内側に詰まることや、ハイペースでのゴールスプリントなどロードの中でも特異性を必要とする。未経験者がいたことやコースが予めわかっていることで、スタッフでタクシーにて視察、ビデオで撮影し夜のミーティング時に映像を見ながら選手への説明を行った。上りゴールや、幅員、車減速用のかまぼこ上の盛り上がり、キャッツアイなど確認ができて参考になった。試合方法は距離でなく、スタート50分後に2.9kmを3LAPでゴールする方法で、スピードのある巴直也（神奈川：法政二）が有利かと思われた。日本人選手も序盤、後方待機であったが徐々に順位を上げていき残り2周で巴直也が先頭集団で通過、しかし、ラスト1周で韓国選手にかわされ同チームの選手が1、2位を占めた。優勝選手はMTBのエリートを含む、MTBの韓国チャンピオンであり指導者も元MTBチャンピオン。韓国選手の下りの速さ、ハンドリングの良さはこの辺に理由があるかも知れない。内間康平13位、巴直也30位、寺垣慎太郎31位他の選手も集団でゴールした。不安視された落車事故もなく終了した。

6月14日 第7ステージ Ul San → Po Hang 80.0KM

「伊藤の復活、ジュニアチーム初のメダル」

距離が急遽予定より10km短くなり、しかも山岳部がカットされるなど山岳を得意する日本チームにとっては残念な結果である。団体総合1位を走る日本選手へ

の対応策か?などスタッフ間で冗談もこぼれた。スタート後、30km地点で松井の落車、腕を打撲したらしいが集団に追いつけずにDNF、砂だまりのあるコーナーで石倉が2度目の落車をしてしまった。懸命に追いかけるが走行中の様子や今後のことを考え、ダウンさせ収容させた。以後のステージ参加は大事をとって取りやめ、無念のリタイヤとなった。40km地点で伊藤がアタックを仕掛けた。伊藤は徐々に自信をつけ、単独で追いかけて6名のグループで集団の差を広げる。2名が脱落し4名でのゴールスプリントで伊藤3位、伊丹4位、約1分遅れながら14位で寺垣が続く。JCFジュニアチームは団体が3位に浮上した。

6月15日 第8ステージ Po Hang → Gim Cheon 107.3KM

ステージも終盤を迎え残るステージは2ステージとなった。選手は疲れてはいないが言葉の通じる12名の選手達はレース以外では和気藹々、レースの戦略としては高体連チームの総合優勝、ジュニアチームも伊藤・石倉の落車があったがチームとしての上位入賞を目指すことにした。スタート時は相変わらず後方からのスタートで、チャンスを伺い前でアタックを繰り返す展開。途中、5名の集団が抜け出し集団を引き離しにかかっている。ジュニアのため無線の使用は禁止されており、レースの情報はチームからの給水時が頼りである。54km地点で伊藤がコミセールに合図し、チームカーを呼んだ。給水とともに無線からのレース情報を伝え、集団へ復帰した。日本の慣れない選手達は給水のため集団後方に下がることを集団から遅れはしないかと心配して、なかなか下がってこない。もはや逃げている集団にライバル選手が含まれていれば、単独でも追いかけるしかない。日本人が12人も走っているながら4、5人でまとまって逃げは打てないものかと思われる。また、選手も展開を仕掛けるがアメーバー状のように集団は変化し続け、集団中での様々なけん制やガードに阻まれ、日本人選手の集団作成はやすやすと成功しない。器材トラブルや落車時の対応もカザフスタンチームは必ず、チーム内1名がトラブル選手を待って2名で先頭交代を繰り返しながら集団に追いつくなどレース慣れしている。コースは20km地点で2kmの緩やかな登りが3回、91km地点で逃げ集団はメイン集団へ吸収された。またもゴール勝負となりカザフスタン選手が集団を7秒離し優勝、大集団でのゴール勝負であるが高体連チーム寺垣が11位、松井26位伊藤34位であった。この時点で高体連選抜チーム総合1位、ジュニアチーム3位、4位にカザフスタンチーム、1位と2位は3分29秒差、3位と4位は25秒差と逼迫している。逃げが決まれば逆転も充分にありうる。最終ステージまで油断は出来ない。

6月16日 第9ステージ Gim Cheon → Cheong

いよいよ最終ステージを迎える。Gim Cheonは韓国競技連盟上層部のお膝元でもある。駅前のスタート、ポケットマネーによる直営レストランでの外国選手スタッフ・審判団を集めての夕食パーティーも主催された。このような積み重ねが少ない経費での運営を影ながら助けている。審判員の多くはツール・ド・韓国と同様なメンバーで構成され、レースに執務することが社会的に認知され、諸外国と日本の違いを感じる。労働も一つの社会貢献ならばボランティアとして競技スポーツを支えることも同等に扱われる。そして、コーチ(指導者)は毎年、指導実績によって入れ替わりがある。このシステムにより韓国もカテゴリー別にコーチが複数人配置され、選手以上に生活がかかっているコーチ達の姿は真剣そのものに写った。アマチュア競技であるが職業としてのカテゴリー別スタッフ(監督・コーチ・メカニック・トレーナー)の確立は自転車競技を含む日本スポーツ界にとって急務である。戦後、日本のスポーツ界は学校体育スポーツに支えられてしまったその功罪を早く整理し、手段を講じていかないと日進月歩で発展・進化している世界とは離されるばかりである。

さて、最終レースは今ステージ一番の長丁場であり、給水も2回まで認められた。スタートから17km地点で約1.8kmの登りがあったがたいしたことはない、日本人選手団も含め、最終レースで総合順位と総合チーム順位を意識した展開が続いた。集団の中で激しいアタックが繰り返されるが成功しない。ステージレースは参加した選手が個別に勝ちを狙うだけでは結果的にチームプレーにやられてしまう。6名選手団の個別の役割が必要であるが、日本のジュニア選手は経験もなく難しいため総合チーム順位を維持するための動きとなってしまった。選手からはボディーナンバーで選手の判別は不可能であり、ジャージカラーが頼りである。レースも終盤にかかり、8名の集団がスパート、その中には越海誠一(大分:別府商業)も含まれているが総合順位でJCFジュニアチームと3位を争っているカザフスタンチームも1名含まれている。最終ステージ、ゴール予定時刻は12:00近くで、街のメインストリートを走る選手団はコミセールカーとバイクに完全にリードされながらフィニッシュを迎えた。ゴール勝負で越海は7位であった。他日本人選手は内間16位、寺垣21位であり、ジュニアチームは集団ゴール。カザフスタンチームに逆転をされ、最終チーム順位1位高体連選抜チーム、2位Eojeongbu high School、3位争いは14秒差でカザフスタンチームの逆転3位、4位ジュニアナショナルチームであった。20チーム、120名での出走は最終段階で17チーム92名の完走者で847.4KMの幕を閉じた。

チョンジュMBC参加選手アンケート

※最終日ミーティングで全員へアンケートの協力をお願いし、後日郵送にて届いたものを紹介します。

- 1 参加した選手の立場から次年度も高体連チームとして、ジュニアナショナルと合わせて2チーム出場することについてどのように考えますか？

高体連チームを参加させることは良いことだと思う。なぜなら、ナショナルチームと高体連チームが大会中はライバルになったり助け合ったりでき、両チームとても良い刺激になったと思うから。

(寺垣慎太郎)

次年度の高体連チームの参加はとても良かったと思います。多くの高校生が出来るだけ早い段階で海外を経験することが出来たし、日本人の意識や走りを変えることが出来るのでとても良かったと思う。来年度からも続けないと日本の自転車競技のレベルアップにもならないし、多くの人が行くことで自分を見つめなおすことも出来、自転車業界においてもとても良いことだと思います。これからもどんどん機会があるならば、海外を経験させるために多くの選手を海外遠征に連れ出して行くべきだと思います。

(竹之内悠)

可能ならば参加したほうが良いと思います。それによって外国のレースという貴重な経験ができ、日本のロードレースのレベルが上がると思います。また、枠が6人から12人になることで国内の選手が目標をたてやすくなると思うからです。(初山翔)

多くの人に海外のレースを体験させてあげたほうが良いと思います。そのほうがヨーロッパでプロになるという目標がより強くなると思います。(伊丹健治)

次年度も高体連チームを参加させてほしいと思う。より多くの選手が海外のレースの状況を知ることにより、世界的な日本のレベルを考えることができ、その経験を伝えることが出来れば、日本全体の選手の意識が少しでも高まれば良いと思う。(鶴川大輝)

自分としては、今回参加できたことで心身共にプラスになりました。参加人数は少ないより多い方が、このような経験ができるという観点から高体連のチームの参加は良いと思います。(吉田隼人)

やはり日本から行くということなので、持って行ける機材も限られてくるのでナショナルチームと高体連チームの2チームが行けるのはとても良いと思いました。(今回もホイールが落車などで壊れて足りなくなりそうになったので。) そういうことがあるので参加させた方が良いと思います。

(内間康平)

こいつは本当に強いと思えるメンバーが JAPAN チームに全員入っていれば高体連チームを作ることはしなくてもいいと思います。でも、今回は高体連チームを参加させたことは成功だったと思います。12人の方が戦いやすい部分もあったと感じます。そして優勝したのは高体連チームでしたから。今年は本当に成功したと思います。(伊藤雅和)

- 2 今回のレースに参加して一番印象に残ったことは？

他国の選手は、他の国に絶対に負けないという気持ちが強いと思いました。今回のレースで日本人選手が逃げようとする必ずカザフスタンの選手か韓国人の選手が逃げをつぶしに来たり、ゴールスプリントでは、集団の前をおさえて見方の選手を先に行かすなど、どのステージも無駄にしない走り、レース中の気持ちの強さは今回一番印象に残り見習わなければならないところだと思いました。(寺垣慎太郎)

韓国人の平地と下りの速さです。日本の高校やジュニアの試合ではない、初めて経験するスピードでした。伊東や伊丹のように去年のイタリア遠征には行かなかったので自分にとってはロードでは初めての海外遠征でした。シクロクロスやマウンテンバイクなどでは合計3回の遠征を経験しているためイメージが出来上がっているけれど、ロードレースは初めてだったので自分がどの程度まで走れるのかだいたいイメージしかなかったが、それを超える平地のスピードだったし、下りがなぜあんなにみんな速いのがわからなくて初めは戸惑ったが、レース後半になるにつれコツも掴めて韓国流の走り方に合わせていくことができました。(竹之内悠)

日本のロードレースと違って平地のスピードが違い、何よりレース中のアタックの回数がとても多かったです。

第一ステージでパンク、メカトラと2回トラブルになり、第二ステージからは、1日目のトップ集団とのタイムを縮めるためにアタックをかけ、第五ステージまではそのアタックが決まる場面が多く、上位に入ることができました。しかし、第六ステージからは自分がマークされてしまいアタックが決まりませんでした。原因としては、アタックを仕掛けるタイミングなどもあるが、自分の力不足を思い知らされ、これからは今以上の高い意識と目標を持っての練習をすることで克服したいと思います。なおかつ、ツールドラビデビ、世界選手権に参加することにより、自分のレベルが益々向上できると思うので、良い結果を出して海外へ行けるように強い気持ちを持って練習に励んでいきます。(吉田隼人)

自分は初めのステージからガンガン行こうと思っていて、それを実行できたことがよかったです。そして、アタックも繰り返し何度もやることができたのでよかったです。(内間康平)

初日に落車してしまって個人総合を狙えなくなってしまうのでとてもショックでした。どんどんアタックをしかけて逃げを作って個人総合を狙っていました。その後のステージでは、落車をした時に痛めた左足に力がうまく入らなくて、自分が考えていたレース展開には持ち込めませんでした。実力が足りなかったのも事実です。むしろ、左足よりただ単に実力がなかっただけでした。自分にはまだまだ一人で走る時のスピードやアタックする時の鋭さなどが足りていませんでした。絶対に勝つてやるという気持ちも足りなかったかもしれない。総合が狙えなくなったので各ステージで頑張るしかないと思いました。1日だけ3位に入れたことは少しだけ良かったことでした。その日はうまく逃げられました。自分はこういうことがしたいのだとゴール後に再確認することができました。(伊藤雅和)

4 今回のレースに参加して自分で気がついたことは？自分の優れていると思う点を書いてください。

私は平地だけでなく山岳も走れることに気づきました。逃げを作ったりかけたりすることや、韓国の人やカザフスタンと同じスピード域まで加速することは出来るのですが、そのスピード域を確実に維持する力が、僕もそうだし、僕以外にも日本人の特徴として少ないと感じました。もっとスピードを維持できるようにこれから色々な練習を組み込んでいきたい。自分の優れていると思う点は、韓国人より細かいテクニックが出来ることと、登りが早いことだ。今回は勝負ところの第五ステージの山頂ゴールのステージで最後の登りの少し手前からリヤタイヤの空気が抜け始め、登りだす頃にはペコペコだった。チームカーのいるところまで下がってホイールを交換することなくパンクしたまま登りました。その時パンクしたままでもある程度登ることが出来てとてもよかったですと思います。(竹之内悠)

一定のペースで走る力。登りの登山力。集団の前によくやる気持ち。足りないのはインターバルをいれたアタックの加速力。一瞬のパワー。ゴールスプリント。(初山翔)

自分は他の選手より地脚があると思います。登りか、少ない人数のなでの逃げが得意です。

(伊丹健治)

自分の長所は危険予知能力に優れていると思う。落車やパンクというトラブルは少ない方だと思う。また、能力が全ての種目で平均的である。これからは中、長距離に振り分けたいと思う。短所はとびぬけた才能がないため決定力が不足している。しかし、何か一つだけにこだわるのではなく全体的なレベルアップがしたい。

(鶴川大輝)

初めての海外ステージレースを経験して、オールラウンダーとしての自分で、特に山岳ステージでの4位と第三ステージではトップ集団走行中も自分からアタックをかけたりと積極的な走りことができました。全てのステージでもこの走りができるように日々意識をして練習を積んでいきます。(吉田隼人)

自分で気がついたことは、ステージレースを走れる足と、アタックを何回もできるということです。しかし、スプリント力が無いことにも気づきました。(内間康平)

自分の優れている点は、逃げに乗った時にスピードを持続できることだと思います。逃げている時のスピードは遅くはないと思います。今回そういうことに気がつくことができましたが、自分が得意だと思っていた山岳で、先頭グループについて行けなかったのも、山をもっと速く登れるようにしようと思いました。平地のスピードは昔よりついているのもっと伸ばしていきたいと思いました。(伊藤雅和)

あと、登りのステージでは韓国のチームは遅かったのに、小さな登りを速く感じました。韓国の人々は登りを自分達より頑張っているのだと思いました。(初山翔)

平地のステージはほとんど強くても逃げのタイミングがよくないと逃げられないと思いました。それと、日本の選手より韓国の選手の方が積極的に走っていると思いました。特に日本の選手は、最後の最後まで集団の後ろで足をためておいて、ゴール直前になって前に出てくる傾向があると思います。それに比べて韓国の選手は、始めからほとんどの選手が前に出ようとしていたり、アタックをしようとしていたと思います。(伊丹健治)

日本のレースのように一部の選手だけがレースを作るのではなく、多くの選手がアタックをすることにより、集団のペースを高く保っている点が、日本のレースと大きく違うと感じた。しかし、選手それぞれの力は日本人と大きく差が無く感じたが、精神的な面で大きな差があると思った。(鵜川大輝)

外国人選手と初めて走りましたが力の差はありませんでした。自分が辛い時に相手の顔を見て自分以上に辛い顔をしていたのが印象的でした。自分は将来、ヨーロッパでプロのロード選手として走る為に頑張っています。今回参加したことが自分の中でプラスになり夢が近づいてきた感じです。(吉田隼人)

自分にとって初めての国際レース、やはり日本のロードレースとは違い、スピード、積極性などがすごいと思いました。特にアタックがずっと続くのが本当にすごいと思いました。そういうところでは韓国人を尊敬します。(内間康平)

レースをして自分より強いと感じる人も何人かいましたが、自分も精一杯の走りが出来たら決して通用しないわけではないと感じました。登りのステージなどでは日本のチームは先頭を引くことが多かったのです。なので、登りは日本チームの方がむしろ強いと思いました。気持ちでは韓国チームの方が強かったと思います。日本チームは後ろにいたことが多かったです。(伊藤雅和)

3 自分のレース運び、展開は思ったとおりにできましたか？ その原因は何だと思いますか？

展開は、だいたい思ったとおりにできたが、終盤のレースで、総合優勝のためにサポートに回り、外国人選手の逃げをつぶしたり、サポートカーに情報や水をもらいに行けたが、日本のチームの仲間選手を逃がすことができなかった。原因は日本人選手に対する外国人選手のマークが厳しかったのではないかと考える。(寺垣慎太郎)

9日間の前半と中盤は思ったように走れなかったです。疲れがたまっていたというのものもあるかもしれないけれど、韓国の慣れないスピードなどで自分の走りが出来ず、調子が上がらず、ただ苦しい試合だったと思います。けれど、後半の3日間は韓国の走り方、リズム、スピードにも慣れていき、それと同時に本来の自分の走りが出来るようになってきました。特に第8、9ステージでは2日間ともゴール前2、30kmから足が異常に軽く感じてきて、気分も調子も良くなり何度もアタックしたり、日本では出せなかったようなスピードで集団をひいたり、レース自体を動かすことが出来てとてもよかったです。それらを通して自分の課題を再発見することができました。(竹之内悠)

第一ステージと第五ステージでいい走りができたため、個人総合で上位に入れました。それはよかったのですが、そのために後半のステージでは成績を気にする余り、逃げに乗ることばかりに気をとられて逃げを作る側に回れなかったことが残念です。(初山翔)

第五ステージの頂上コースは、登りに入る前に集団の前で登りに入る事ができたので、楽に先頭集団で登ることができて上位でゴールできたのだと思います。第七ステージは短い登りを登って下ってまた登るという場所で、1回目を登った後、一瞬、集団のペースが落ちた時に逃げる事ができたので良かったと思います。第九ステージは自分でこの逃げは決まらなと決め付けてしまい、たくさんの人に逃げられてしまった。すぐ皆で協力して追いかけたがその時はもう遅く、追いつくことが出来なかった。(伊丹健治)

今回はあまり思うような展開を作れなかった。自分の脚質では、もがく時に長いインターバルをとってしまうので、スピードのある選手の中から抜け出すことが出来なかった。さらに、スピードを落としてしまったタイミングでのカウンターアタックが対応しきれなかった。これからは乳酸がすぐに抜けるような体づくりをしていきたい。(鵜川大輝)

5 持参品について、自分で持ってくればよかったもの、持参して不必要と感じたものはありますか？

今回のレースはコスミックのホイール1ペアしか持って行かなかったが、五日目のコースは山岳ステージだったので登り用のホイールも持って行けばよかったと思います。また、スタート前はアップができないので、スタートオイルを持って行けばよかったと思います。不必要にかんじたものは特にない。(寺垣慎太郎)

持って行けばよかったと思うものは、音楽が聴ける小型スピーカー。不必要だったものは特にない。(竹之内悠)

今回は自分の準備で充分だったと思います。スプレー式ではないチェーンオイル、アームウォーマー、透明のカップ、洗剤、洗濯ロープ、パワージェルなどは重宝すると思います。不必要と感じたのは普段着です。支給されるので充分でした。(初山翔)

プロテインとかビタミン、ミネラルなどのサプリメントは持って行ってよかったと思います。かなり外食が多くなるので食事が偏ってしまったからです。(伊丹健治)

持って行ってよかったものは、ラムネ菓子(クエン酸とブドウ糖)、個人用のスプーン、ホイールのマグネット、タイラップと安全ピンの予備、ドリンク。不必要だったものは、必要以上のタオル、DHバー。(鶴川大輝)

洗濯洗剤が足りなかったので多めに必要だと思います。不必要なものはありませんでした。(吉田隼人)

特にどちらもありません。(内間康平)

湿布を持って行けばよかったと思いました。(伊藤雅和)

<ツール・ド・ラビテビ2006 報告書>

中田将次（熊本市立千原台高等学校）

1. 参加者

スタッフ 福田公生（JCF） 伊藤栄一郎（昭和第一学園） 中田将次（熊本市立千原台高等学校）
選手 伊藤雅和（法政第二） 吉田隼人（榛生昇陽） 内間康平（北中城） 初山翔（麻溝台）
 嵩田義明（川越工業） 篠原力也（鹿屋体育大学）

2. 準備～現地到着まで

5日前に急遽搭乗便の変更があり、集合時間が13:00から9:00に変更となった。遠方より参加の選手は前泊を余儀なくされた。

事前に送った荷物の確認のため、早朝より空港へ先入りし、宅配カウンター（QL ライナー）にて、選手の自転車と機材確認、予備の車輪に加えて補給物資等の確認と梱包を済ませて慌しくチェックインした。電気（無線）関係のトラブルにより予定時刻を約30分遅れて離陸し、約12時間のフライトが始まった。順調なフライトが続いていたが、あと1時間程度でシカゴ空港に着陸という所で、強烈なエアポケットにはまり、機内サービスのワゴンも宙に浮き、機内は絶叫とともに全員が中に浮いた。一部負傷者を出すほどであった。

シカゴAP到着後、別ターミナルより乗り継ぎのため、自転車等荷物をピックアップし移動した。乗り継ぎまで約8時間あったが、レース前のため空港を出てちょっと観光という訳にもいかず、空港内で退屈な時間を過ごした。時差の関係もあり強烈な睡魔に襲われながら転寝でしのぎ、夕方5時30分にアメリカン航空に乗り継ぎ約3時間、まるまる24時間を費やし疲労困憊の状態でモントリオール空港に到着し、シャトルバスでホテルへ移動した。事前情報が殆どなく明日への不安を隠せなかったが、昨年コロンビアチームの通訳兼ドライバーの方と偶然にもホテルのロビーで再会しなんとか心配は解消された。夕食を終えた頃には既に23時を回っており、選手たちに明朝の連絡を伝え（7:30起床、8:00朝食、出発の準備を整えて9:00にフロント前に集合）、遠征初日を終えた。

翌朝、コロンビアチームとの乗り合わせにて会場入りするため、まずはホテルにて日本チームと自転車等の荷物のピックアップするも昨年とは様子が違う…何か変である。大型バスが来ない…？中型？どう考えても2チーム分の人間と荷物が運べる車ではない。結局は主催者と荷物輸送の段取りを整えて（荷物輸送用の箱車確保）事なきを得たが、自転車等競技用機材の到着は明朝6:00とのこと。昨年はギリギリまで到着しなかった経緯があるので非常に不安である。しかし昨年とまったく同じスタッフ体制での参加のため不安を抱えつつもスタッフ間では「海外だからこんなもんだらう…」みたいな感じであった。

さて、トロントより移動してくるコロンビアチームとの再開を心待ちにするも予定時間を過ぎてはなかなか到着しない。1便遅れでも来ない…。コロンビアの通訳の方が携帯で連絡を取るも連絡が取れず…。ここで昨日の余裕が消え昨年以上に不安を感じる。今日中に現地に入れるだろうか…。

バスでの移動を考えると、昼までにはモントリオールを出発したいが…。昨日から色々お世話になっている都合上、あまり不快感を露わにすることもできず、とにかく事故なく（そして早く！）到着してくれるのを祈るだけである。そして昼過ぎにやっと到着。と思いきや、選手の預けた荷物が一つ行方不明のようである。色々手を尽くすも発見できず、移動時間の都合もあるので空港を後にした。この時既に13:30…。4時間30分も無駄なエネルギーを使ってしまった。

移動途中、巨大マクドナルドで禁断の軽食を調達、ジャンクフードをレース前の選手に食べさせていいのだろうか…？と疑念に苛まれつつも、人間お腹が満たされると「まあいいか…」となる。

計18名での移動のため、中型バスでの移動は少々きついですが、ドライバーの方が女性で運転が丁寧なため、不快感を感じることはなかった。途中、カナダナショナルのメインスポンサーより、再度軽食が支給（サンドウィッチ+ジュース+ドーナツ）されテイクアウト。再度移動を開始し、道路わきの休憩ポイントを探す。いいのに移動しながらでも…。湖畔脇のスペースに車を止めしばし休憩を取る。この時の時刻は19:30、まだまだ陽は高い。国民性の違いというか、生活習慣の違いなのか、少なくとも私たち日本でレースをしている選手・スタッフにとっての「常識」は通用しないようである。

疲労以外の体調不良者を一人も出すことなく、21:00頃、陽が落ち始めると同時に、昨年と同様の宿泊先である学校に到着した。夕食時間から大幅にずれてしまったために食事は期待していなかったが、ご丁寧に巨大ピザを注文して頂き、初日から現地テイストを十二分に堪能することができた。最後は車の洗車機のようなシャワーで1日の労を癒し日付が変わり、明日の朝に無事に自転車が着いていることを祈りながら就寝した。

3. 初日～最終ステージ

昨年、日本チームに与えられた部屋は窓が無く、換気すらできなかったため、入宿の際に窓がある部屋に変更をお願いしたら快く変更して頂いた。しかも、今年はエアコンが効いており、昨年のサウナのような環境とは大違いである。贅沢と言われればそれまでであるが、コンディションを考えると居住空間のストレスは少しでも少ない方がよい。

21:00過ぎの日没にも関わらず、早朝4:00を過ぎると明るくなり始める。早朝より気になる自転車の到着を玄関で待つも、なかなか届かず、昨年とまったく同じ展開である。こちらサイドの理解と認識不足なのかそれとも国民性？地域性？6:00到着予定の自転車を含む荷物は結局10:00過ぎに到着…。日本では考えられないことであるが、これ位は序の口である。慌しく自転車を組み立て、11:15頃より身体をほぐすかたわら、昨年と変更になったコース視察のためロードワークに出掛けた。

途中より急に雲行きが急に怪しくなり、約20分で終了して昼食。返って来た直後より、これぞ雷雨！というに相応しい雷雨であった。台風並みの風と雨、加えて雷がすぐ横の木に落ちて折れる…。そのような状況のため、昼食後は夕方のプロローグに向け自転車の整備を行なった。

レース初日は、夕方18:30よりチーム紹介&プロローグを兼ねた400mTTである。

一度は雨もやみ安心していたが、17:00過ぎにまたもや雲行きが怪しくなり、再び強烈な雷雨に見舞われた。宿舎の中にまで雨水が流れ込んでくるような大雨である。スケジュールの変更等不安を抱えつつ、前半のチームは選手紹介のため雷雨の中、移動を開始した。招待チーム等有カところは宿舎で様子を見ているので、日本チームも宿舎にて待機することとした。定刻を30分過ぎてチーム紹介は翌日へ順延の連絡を入手、着替えようかと考えていたら、プロローグは実施するとのこと…。ところが変更となった時刻どころか待てども始まる気配なし。雷雨もおさまり、小降りになってきたので、スタート地点に移動しスタートできる体制を整えておくも、一向に始まらない…。結局、1時間30分遅れてスタートとなった。

大幅に遅れた甲斐もあり？路面コンディションも問題なし。直線2コースで1名ずつコースに入り2車立ての400mTT選手紹介も兼ねており、発想としては面白いし、見ている方も退屈することはなかった。

日本チームは最終組、地元カナダナショナルチームと対戦した。最終組、地元カナダということもあって異常な盛り上がりだった。勝ち負けに関係ないとはいえ、6戦6敗、カナダチームの全勝であった。選手曰く、まじめにタイミングを計っていたら、カナダチームは全員がフライングでスタートしたとのこと。生真面目な国民性が全敗につながりました。

競技終了は夜の21:00過ぎ…。明るいとはいえ、このような習慣のない日本選手は疲労とストレスを感じているはず。宿舎（学校の教室）に帰って慌しく食事&シャワーを済ませ就寝したいが、身体が興奮しているので寝られるはずもない。寝ようと思えば思うほど寝られない…。

翌日は午前がロード、午後は夕方よりチームタイムトライアル。走りや結果でストレスを発散して欲しいものである。

第2・3ステージ

6:15起床、6:45朝食。朝食を摂ってそのまま移動バスに乗り込みスタート地点へ移動の予定であったが、考えることはみな同じで食堂は大混雑！朝食にありつけるまで40分以上並んだ…。7:30に出発予定のバスに乗れる訳が無く心配していたが、宿舎から外に出ると移動バスを含めた全ての移動車両が駐車場にありホッとした。

天候は曇り。やや肌寒く感じる。8:00過ぎにスクールバスにてスタート地点へ移動、9:30頃到着。軽くウォーミングアップ開始。路面が荒れているようには見えなかったが、ウォーミングアップ中にパンクが発生、レース中ではなく良かったなどと談笑しているうちに、スタート地点に選手が集合し始めた。ここで2回目のパンク。スタートには間に合ったので事なきを得た。何かの暗示でなければよいが心配である。

スタート地点を中心に3周回のクリテリウムで地元の方にアピール後、街中を通過してロードに出た。道中もタイトコーナーの連続でスタートから5kmでパンクを含めて5名以上が遅れていた。

レースはスタート後約1時間経過時点で、吉田&初山を含む4名のエスケープ集団を形成し、アドバンテージは最大50秒まで広がったが、今一つタイム差が広がらない…。1名の選手が脱落し残り3名になった時点で、迷いつつも吉田は集団に戻ることを選択、しばらくして初山を含む2名も集団に吸収された。この時点でゴールまで約40km。その頃には曇り空だった空も徐々に青空が見え始め気温も徐々に上昇した。とはいえ、日本のように、雨上がりのジメジメした感じは無く不快感は殆どない。

残り40kmを切った所で、前回チョンジュで活躍した沖縄の内間康平がアタック！内間を含む6名でエスケープ集団を形成しゴールを目指す。残り20km地点で集団とのアドバンテージが約1分程度、集団の中でも動きは活発であったので、ゴールまでのことを考えるとリスクは高く微妙なタイム差であったが、逃げ切りに成功、6名でのゴールスプリン

トとなった。内間は3位に入賞し、本人にとってもチームにとっても幸先の良い滑り出しとなった。午後はチームTTが行なわれるため、喜びはそこそこに宿舎へ帰り、慌しくアタッチメントハンドル等取り付け次のレースに備えた。

昨年までのコースは、チームTTの距離も長く、ロードの順位よりもチームTTのタイム差がそのまま順位に反映されるため、カナダチーム以外には不評であった。昨年の大会後に要望を出し、本年はその部分が大幅に改正され、街中のクリテリウムコースを中心とし、距離も短くなったためチームTTで大きな差がつくことは無くなった。

コースの特徴は、ほぼフラットコース、コーナーの立ち上がりがり上り坂で長い平坦路が無いいため力の差よりも、コース取り（テクニック面）が重要なコースであった。機材選択においてもディスクホイールの恩恵もそう大きくは無いように感じた。そのような意味では日本チーム向きのコースであったと思われる。

レースはTT種目に期待のかかる篠原は1周目でオーバーランにてコースアウト…。鳥田は2周目前走者と接触落車、初山2周目遅れ始めるなど散々であった。他のチームも例外ではなく苦戦していたようである。それでも38秒差の10位でフィニッシュした。「たら…れば…」は競技の世界に通用しないが、通常通りの力が発揮できれば、3位以内（優勝も可能であった）には入れたのではないかと思われる。

第4ステージ

AM7:30起床、8:00朝食。レースが午後からということもあり、ゆっくりすることができた。

9:30からリカバリーも兼ねて軽くロードワークを実施、翌日の個人TTコース&午後のクリテリウムのコースを走った。入念に試走するもコースがなかなか頭に入らない選手が複数名…。住宅街もコースに含まれており直角コーナーが多く、しかも幹線道路から細い路地にはいるような場所もあり覚えにくいことも一因かも知れないが、他力本願で覚える気がないようにも感じる。

12:00~チーム写真撮影、14:30~ギアチェックを実施、定刻通り16:15ロードスタート。距離88.5km（昨年とは逆周りで上りが多いコース）ゴール地点を基点とした街中を6周するクリテリウムにて実施。落車明けの鳥田も痛みはあるものの頑張るとのこと。本人の意思を尊重し出場させる。

スタート後メカトラブル発生。内容はハンドルとステムのブランドメーカー違い（デダのハンドル25.8mmにITMのステム26.0mm）締まっているようでも、強い力が加わると緩む。メカトラブルというよりも、情報不足による人為的ミス（トラブル）である。以後気を付けたい。

スタート直後よりパンク続出！20km地点までで20名近くがパンクしたのではないかと。空気の入れすぎによるバーストのような気がする。日本チームも例外ではないが、空気圧が異常に高すぎる。

レースの方は距離が短いこともあり、序盤から各チームの有力選手が積極的にアタックを繰り広げられた。ゴールの町に入るまでに先頭の逃げ集団は約20秒のアドバンテージを持っていたが、街中の周回（クリテリウムコース）に入るとメイン集団に吸収された。

スピードある篠原&鳥田、レースセンス光る伊藤&吉田、そして総合で上位につけている内間と役者は十分に揃っており、期待をもってゴール前に陣取ったが残念ながら伊藤の9位が最高位であった。実力差というよりもレースプランができていないように感じる。何をしたいのかが伝わってこない…。経験といえばそれまでだが、戦略は選手の能力&実力である。以後のレースに期待したい。監督・コーチとしての戦略も含めた取り組みの甘さを痛感したステージであった。

明日は個人TTである。例年このステージの順位（記録）が総合順位の行方を決めているので、それら過去の反省から今年は無理してディスクホイールを持ち込んだ。機材面での不利は減り十分戦える状態になったと思われる。

欧米諸国の選手の経験からくるレースセンスや自転車を操る技術を短期間、短時間でどう埋めるか…。海外遠征を通して「きつかった…楽しかった！」だけでなく、競技者として今後の自分自身の成長のためにどれだけ多くの事柄を吸収することができるかが、今後の課題である。

第5ステージ

AM5:30起床、6:00朝食（篠原のみ5:30）出走時間がバラバラということもあり大変である。しかも午後はクリテリウムと2本立て。まったく気を抜くことができない。しかしながらグループ別の出走時間を見ていると各グループにチーム毎に1名ずつ入っており、全ての選手にサポートカーがつけるようにされたのでは？昨年はサポートにつけない選手もおり、その反省が生かされたのであろう。昨年と比べても多くの場面で反省が生かされており、日本チームへの心配りも感じられた。

会場地バルドールはゴールドラッシュに沸いた金塊の町。個人TTのスタート地点は町の観光名所ともなっている金鉱のトンネル（急斜面）を200mヒルクライムしてから市街地が出るコース。ところがこのコースが難儀である。ツルツルして非常にスリッパし易く、ダンシングなんてとんでもない。力むとスリッパして前に進まない…。距離14.5km。

チームカー福田監督、宿舎管理&選手送り出し&コース上の応援中田、激寒地下トンネル選手管理伊藤にてスタッフを配置しレースに臨んだ。昨年も同大会を経験しているの、事前準備も問題なかった。昨年より距離も短くなったこと、また、街中の住宅地（路地）でのコーナーも多く、減速を余儀なくされるため大型でパワーのある選手が絶対有利とはいえるコースではなかった。加えて、第2グループからは風が強くなり、思うようにスピードが出せない。（平地で30km+α）そういった意味では日本選手にも十分に勝利するチャンスがあると感じた。結果的にはTTを得意とする両名が上位にきたが、このコースであることと選手の実力を考えると充分に一桁台の成績を残せたのでは…と考えると少し残念である。結果は、鳶田（埼玉：川越工③）の20位が最高であった。日本においてこの類のレースが少ない（距離的な問題も含めて）ため、選手もペース配分がつかみにくかったようである。日本で開催されるレースのように道路の清掃が行き届いて砂利も無いようなコースは海外ではありえない。常に道路状況を的確に見極め走行しなければ、結果として順位を落としてしまう。

優勝選手は21分35秒（平均スピード40.3km）選手の装備を考えると物足りないが、強風の影響を考えると仕方なし…？

第6ステージ

宿舎を出発しウォーミングアップを兼ねてスタート地点に移動を開始しようとした時、一昨日同様雲行きが怪しくなると思ったら雷雨！本当にするの？という位の大雨であった。

コミッセルから何の連絡もないので仕方なくスタート&ゴール地点へ移動開始。雨は幾分落ち着いたものの、何の情報も入らないため、仕方なく雨の中ウォーミングアップを開始。不測の事態に備えてスタッフも虎屋に両合羽を調達しに行く。しかし税金が高い。

小雨の中、スタート！！開始後5周くらいで雨もおさまり、路面も徐々に乾いてきた。と同時に3名の選手がエスケープに成功。カナダナショナル1名と初山が懸命に追うもなかなか捕まえることができない。後方からはメイン集団が迫り残念ながら吸収された。残り5周を切り依然3名がエスケープ集団を形成。メイン集団のスピードが緩んだ瞬間、内間を含む数名がアタック。第2集団のゴールスプリントを内間が制し4位に入賞。伊藤もその集団にてゴールし7位に入賞した。ステージ毎のチーム優勝も飾ることができた。作戦とメンバー次第ではフラットコースでも十分に勝利することができると感じた。

第7ステージ

AM8:00起床、8:30朝食。11:00からリカバリーも兼ねて、軽くロードワーク&コース視察

約1時間スクールバスでスタート地点のアモスに移動。教会前より定刻17:00にスタート予定であったが、スタート8分前にコロンビアのチームマネージャー&選手が泣きそうな顔しながら日本チームにやってきた。必死に何かを訴えているが何をしゃべっているかまったく分からないが、前ブレーキを指差し状況が理解できた。フロントのブレーキワイヤーが切れている！しかもブレーキはカンパ…。何故日本チームに持ってくるのかは不可解であるが、どうやら期待されているようなので対応することにする。ワイヤーが抜け…。純正のワイヤーではないため、ワイヤーの頭がレバーにめり込みなかなか抜けない…。やっと抜けたと思ったら、ほこりが固まって、新しいワイヤーが入らない。結局ブラケットも外しワイヤーを通し完了。ジャスト8分。事なきを得た。コロンビアには移動初日にお世話になっているのでお返しできた。また、緊張感のある作業ができていい経験をさせて頂いた。しかしながら、原因は100%整備不良！そのような意味では、日本選手はある程度整備ができていたのでトラブルもない？

教会を中心としたパレードクリテリウムのあとロードに出るコース。当初はパレードスタートではなかったはず…？コースの一部が傷んでおり急遽アスファルトを入れるもクレーム続出！またまた、アスファルトを剥がしていた。不可解である。そんな中3周のクリテリウムを経て、本格的なロードが始まる。

レース前半、5名の選手がアタックし、エスケープが決まる。しかし日本選手含まれていない。

途中のKOM（山岳賞）をとり5kmぐらい前から篠原と初山がアタック。しかし頂上、数十メートル前で捕まる。メイン集団はカナダチームがコントロール（抑えた）され、なかなか動くことができない。午前の練習でゴール付近の状況は把握済み。選手全員が登り（約1.5km）ゴールが自分たちに向いていると口を揃えて言っていたので、自信があるのが伺える。しかしながら、少しでもゴールスプリントの人数を減らしたい。

残り30km地点で伊藤と吉田を含む3名がアタック。その後1名が脱落、日本選手2人が前の5人に追いつき7名で逃げる。

篠原が中盤にパンクするも、コース左側で車輪交換したため注意を受けた。事前に指導済みであるがレースになると緊張からか忘れていたようである。交換後なかなかペースが上がらなかったが、約30分かけて集団に自力で復帰した。そ

の後集団は篠原と初山がしっかりとコントロールし、残り2kmを過ぎて上りに入る前の段階で約1分のタイム差。1名の選手が単独でロングスプリントで勝負に出る。ノーマークの選手だったので早すぎるスプリントに反応が遅れた。(むしろ最後まで持たないだろうという判断) 最後猛追するも3秒届かず、吉田が2位で伊藤が6位でフィニッシュ。

上りの頂上にゴールが設定(昨年要望)され、前日のコース下見の際にも日本選手全員が自信たっぷりの表情で「任せとください」とのこと。道中の逃げは決まらなかったものの、理想的なゴール設定に吉田(奈良: 榛原昇陽②)が期待に応え2位に入賞、伊藤も6位に入賞し、昨日に続きチーム優勝を飾った。(2位は過去最高成績) 残り2ステージでチーム優勝も可能なだけに、残りステージが楽しみである。

個人成績も重要であるが、チーム総合もカナダナショナルに続いて2位につけており、チームとして何ができるかを学ぶ最高の機会でもあるため、残り2ステージはカナダとのタイム差を詰めることを意識して走りたい。

第8ステージ

AM8:30起床、9:00朝食。11:00からリカバリー兼ねて、軽くロードワーク&クリテリウムコース視察。13:00昼食。14:30バイクピックアップ&選手はバスにて移動。15:30現地着。地元のレストラン?で軽食を摂り、スタートまでしばしリラックスタイム。

レースは序盤より一発狙いで各選手が何度とアタックを繰り返すもなかなか決まらない。アップダウンの多く下りでほとんど吸収されていた。日本チームのファーストアタックは初山。26km内間がアタックかけるも、総合首位のカナダがすぐさま反応し集団に戻された。

30km伊藤フロントタイヤパンク。眞田、内間、吉田3名が集団から下がって伊藤を待ち、先頭交替しながら36km地点で集団に復帰した。眞田が少しきつそうであった。50km過ぎから少数でのアタックが頻繁に行なわれるもなかなか決まらない。そんな中ゴール地点であるバルドールが近づくにつれてやや牽制気味になってきた。そんな中、初山を含む3名がアタックしたが、ゴールも近づいているため集団がすばやく反応した。

間隙について、アタックを試みたグループが2つ合体し9名のトップ集団を形成した。お互いの意思も統一されゴールに向けエスケープを開始し、日本選手はカナダ選手を意識するあまり取り残されてしまった。

決まったかに見えたエスケープ集団であったが、バルドールの町に入り3周回のクリテリウムに入った。残り3周に時点で焼く30秒のアドバンテージ、残り2周で22秒、最終回では13秒まで縮め射程距離においた。最終コーナーから姿を見せたときは100名以上の大集団のまま直線400mのゴールスプリント! 残念ながら日本選手の入賞は無かった。

各チーム疲労の色が見え動きが鈍いように感じた。日本チームも例外ではなかったが、それでもアタックを試み続けた。しかしながら上位チームのチェックが厳しいこともあり、なかなかエスケープが決まらず集団ゴールとなった。集団ゴールによる内間の31位が最高であった(全員同タイム)。

第9ステージ

最終ステージは街中のクリテリウムにて実施(第5ステージとは別コース)された。途中何度も日本チームを中心としたエスケープ集団が形成されるも、チェックが厳しくなかなか逃がしてくれない。最終日ということもあり、各選手ステージ優勝を虎視眈々と狙っているようであった。レースは後半に3名のトップ集団が形成され最終周回に入る。2名が脱落し集団に吸収され1名の選手が逃げ切り優勝を飾った。2位以下は最終コーナーをまわり大集団にてゴールスプリント。好位置キープした篠原が4位に入賞し、個々の選手が力を出し切り全ステージを終了した。

総括

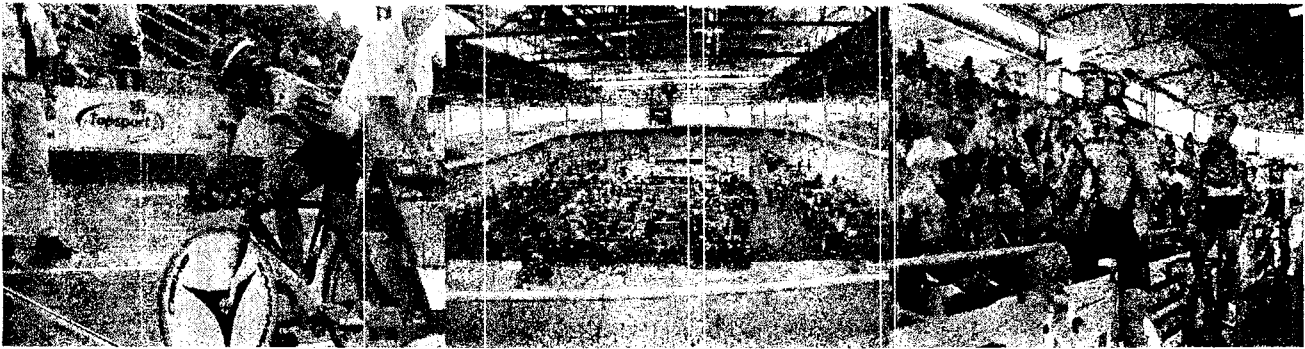
昨年参加した際に日本チームとしてのいくつかの要望を主催者に伝えた。要望した事柄の多くが実現されており気持ちよく参加することができた。選手・スタッフともただ参加するだけでなく、他のチームや主催者・コミッセルともコミュニケーションを深めた結果ではないかと感じている。

今回の結果に関しても、選手の積極的な走りもさることながら、何事にも積極的にアクションを起こし、コミュニケーションを深め、形にしようとする努力が今回の成績につながったと思われる。

競技に関すること、また現地での日常生活に関する事等、まだまだ改善されなければならないことも多くあるが、これら海外研修を単一事業に終わらせることなく、未来ある選手のために今後ともバックアップしていきたい。

2006年世界ジュニアトラック自転車競技選手権大会報告

報告者 折本裕樹



06年の世界ジュニアトラック選手権大会はベルギーのゲント市エディメルクス自転車競技場で開催された日本からの選手団は坂本貴史（八戸工業）佐渡空史（京葉工業）関根彰人（学法石川）松川高大（九州学院）須永優太（白河実業）伊藤雅和（法政二）以上6名に監督・コーチ・総務，更に現地メカニック・トレーナーそしてジュニアの大会に初めて岡田行雄常務理事が団長として加わり大会に臨んだ。エディメルクスはベルギー出身でロードレースの最高峰ツール・ド・フランス5連覇を成し遂げた偉人の一人である。この名がつけられた250m板張り競技場は郊外の国営の総合運動公園内に位置し，国土は日本の四国とほぼ同面積ながら広い公園内には様々な競技施設・キャンプ場・レストラン・宿泊施設が併設されナショナルトレーニングセンターとして通常，ナショナルチームが1年を通して寄宿している。大会時はオフとして自宅に戻され，公園内はバカンスで楽しむ家族連れでにぎわっている。道路には自転車専用道路帯が設けられ，競技用自転車に乗る多くの市民を見ると自転車の本場ヨーロッパという予感を漂わせていた。

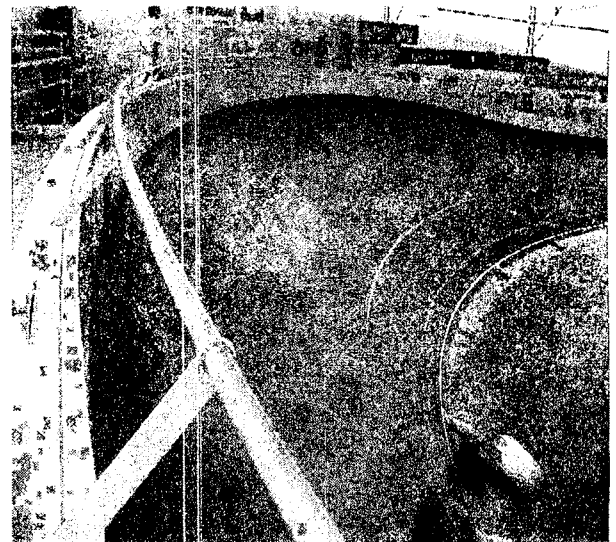
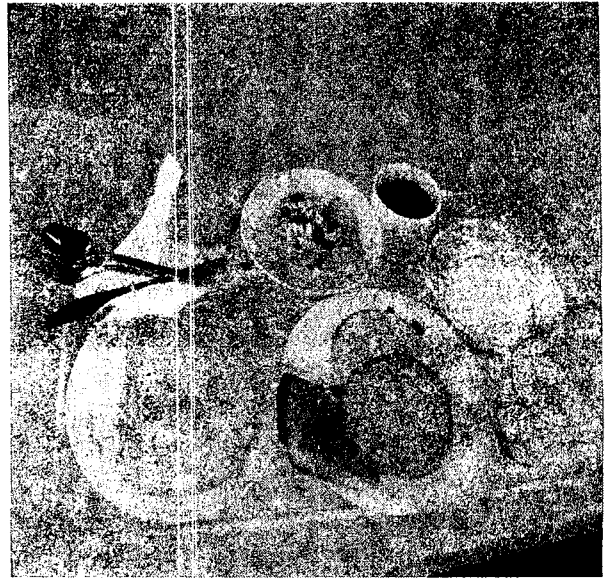
参加選手は1月ジュニア合宿，2月にオーストラリア遠征を経験し，6月には再編が行われたが殆どの選手が残り，文字通り最強ジュニアをもって大会へ臨んだ。250m未経験に近い，選手達はあいにく工事中で使用できないCSC250mバンクでの合宿を断念し，通常より3日早く事前合宿として先乗りしてトレーニングに励んだ。渡航時間は，10時間の飛行機，更に車で3時間，夜9時をまわっても景色は明るかった。宿舎に到着したのは夜12時過ぎであった。宿舎は前述のナショナル選手が寄宿している宿泊施設でシャワー・ベッド・机があるのみでテレビ・冷蔵庫・電話もないが競技場まで約1.5kmと近く参加条件は良かった。合宿中は250m走路に慣れることだけを考え，周回練習や種目別のトレーニングを行った。

大会初日，スクラッチ予選出場の須永はスピード

のある中距離選手である集団には充分ついていけたが最終ゴール前集団内で単独落車，更に走行違反の失格というペナルティもついてしまった。ケガのダメージは軽く，その日は休養させ翌日の個人追抜に賭けさせた。（平均時速45km）続いてポイントレース出場の伊藤は予選15kmで行われ9点獲得で2位通過，午後から行われた決勝25kmは10点を獲得し，6位入賞を果たした。（平均48.9km）予選は殆ど午前中に行われ午後6時からが順位決定戦というのがUCIスタイルである。仕事の終わった一般客が観戦しやすい時間帯に入場料をとり見せ処をつくり，レースの見やすい観客席はお客さんの為，選手関係者は中央ピット内に押し込まれる。午後はチームスプリント予選が行われた佐渡・関根・坂本で臨んだ日本チームは9位であった。タイムは49秒173，1位のイギリスとの差は3秒もある。約2時間後にイギリスチームは予選タイムを更に向上させ優勝した。女子500m決勝は35秒台4名，36秒台でも5名おり世界との差を感じさせた。2日目午前中女子スプリント予選が行われ11秒台を5名が出していた。追抜予選，出場した須永・伊藤ともに3分37秒台の平凡タイムベストタイムは3分18秒台，ベスト4に残るには25秒を切る必要がある。昼近くに始まったケイリン予選5～6名出走，1着のみ2回戦へ進めることができる。松川・佐渡ともに敗退し，復活戦へまわる。反省を活かし思い切って両者とも先行できたがゴール前でさされ敗退した。力で劣っていることは間違いがないが250mバンクの特性を活かした走り方，経験の少なさも敗因となっている。日本で経験している1名1種目制度を見直す必要も感じた。今回，メダリストの多くは複数種目をこなし，更にメダルを獲得している現状を考えなければならない。午後からは1kmタイムトライアル坂本・関根はともに1分8秒台の平凡タイム，優勝タイムは1分4秒0であった。注目すべきは3km追抜に44名のエントリーに対して1kmは22名，ともに各国2名出場でき

るがこれはオリンピック種目から消えてしまった影響か？中距離種目への移行傾向を予感させる。3日目女子2km予選1位はウクライナの選手2分27秒で、最初の1kmを1分13秒で通過、メダル獲得には2分30秒を切らないと届かない現実を感じた。4kmチームパーシュート予選、ベスト4に入るには4分17秒台が必要であった。ニュージーランド・オーストラリア・イギリス・フランスが最初の1kmを06秒台、2kmから1kmを02秒から03秒で走るラップは200m平均12秒4程度である。練習においても2kmを3本をコーチの指示したラップで刻み、3本目がベストタイムであることに驚かされた。午後6時からスプリント予選が始まった。48度もある急斜面、小さいコーナー、何より走路フェンスが腰の位置より低く、近くにいる観客の手が触れそうである中、選手は緊張の中坂本11秒321で27位、松川11秒409の30位、佐渡は11秒636、35位で40名中、24名に残れなかった。トップタイムは10秒3、予選1位、2位がそのままの順位でメダルに輝いた。

今大会を振り返ると望みであった短距離男子の敗退は世界レベルの向上と日本選手レベル停滞を意味するものであり、ジュニアにおいてメダル獲得の国がほぼ固まりつつある現象はトレーニング・選手養成システムと日本のスポーツ界の現状を浮き彫りにした。



2006ジュニア世界選手権ロード（ベルギー・スパ）

強化委員 上野孝（和歌山北）

ロード代表チーム（コーチ・上野孝^{和歌山北}、選手・篠原力也^{鹿屋体育大}・内間康平^{北中城高校}・畠田義明^{川越工業}）は8月7日に会場地スパに入った。当地での競技日程は10日（木）個人タイムトライアル・13日（日）個人ロードレースで、調整期間がTTまでに2日、個人ロードまでに5日と短く刻々と変わる天気にも悩まされ慌しく準備が進められた。コースはTT（11.8×2周23.6km）・個人ロード（13.6×9周122.4km）で、F1グランプリで知られるフランコルシャン・サーキットコースに一般道路を加えた起伏に富んだ変則的レイアウトが用意されていた。ハードなコースに日本チームにとっては厳しいレース展開が予想された。TTでは篠原が下りのランナバルト（ロータリーの分離帯）で転倒棄権・畠田は「下りで引き離された」とレース後に言うように力とテクニックの差を見せつけられたかたちで完敗した。篠原欠場で内間・畠田の2名で臨むこととなった個人ロードは、「個人ロードに懸けます」と内間が我々の期待通り序盤から積極的に集団の前をキープし安定した走り闘志をみせた。一方、畠田も「足の疲れが取れない」と最後まで心配をさせたが集団に食い下がりTTでの不振を払拭する上場の滑り出しをみせ我々スタッフの応援を活気づかせた。しかし、レース終盤アタックの掛け合いによりインターバルが激しくなり内間・畠田の表情に苦しさが見られるようになった。まずは、7周目に入り内間が、8周目に畠田が集団から遅れはじめ追走すら危ぶまれる状況となったがろうじて完走を果たした。ゴール後、悔しい表情を浮かべながらも「集団での位置取りやコーナーリングのテクニックに差はあるが経験を積みばもっとやれる」と将来に期待を膨らませる感想を漏らした内間の言葉が印象に残った。

《反省と問題点》

韓国遠征・カナダ遠征と海外慣れし選手も持てる力は遺憾なく発揮できたのでは無からうか。しかし、世界とは大きな実力差があることに違いは無く今後の強化施策に課題を残した。ステージレースと違いワンデイレースではやはりスピードと持久力の両方が改めて必要だと痛感した。残念なことに今回代表となった3名についてはそれぞれスピード面でやや劣るのではなかったか。また、下りで落車転倒した篠原選手の積極的姿勢は買うがやや技術面に問題があることと、試走段階で大会にあわせたスピードでの調整が必要であったことが今思えば悔やまれる。24年間、毎日生徒と練習に明け暮れている私が脚質の違う三名を引率指導し戸惑ったように改めて大会で勝たせることの大変さと一貫した指導体制の必要性を感じた。現状では、大会前の合宿をする金銭的・時間的余裕も無くぶっつけ本番で臨むしかなくその中で勝たせるためには日頃から指導している監督にもコーチに入ってもらい選手・監督を助けるスタッフを車連に提言すべきではなからうか。以下、気づいた点を列挙した。

機材・・・代車2台 日本から持って行ってもサポートカーにキャリアが付いておらず
使用できず。ホークも曲がっていた。

スペアホイール3P 旧式9段使用できず。

無線6台 ジュニア使用できず。

ローラー3台 助かった。

工具 現地メカが来るとの事で日本からは極力簡単なものだけ持参。
メカが来たのは個人ロード前日。

スタッフ・・・現地スタッフ(メカ・マッサージ) 不要

日本の高校指導者ならあの程度の内容は十分に対応できる

(自転車競技連盟)スタッフ 不要

片言の英語で通用・外国人スタッフは親切

通訳が必要ならコンチネンタルチーム所属の日本人学生

(英語が通用しない国や地域なら誰がいても同じ)

記録・個人タイムトライアル〈23.6 km〉

1位	KITTEL Marcei	(GER)	34分03秒29
2位	PIERRET Etinne	(FRA)	34分14秒68
3位	GALLOPIN Tony	(FRA)	34分36秒52
67位	畠田 義明(川越工業高)		39分23秒31
	篠原 力也(鹿屋体育大)		DNF/落車転倒棄権

個人ロードレース〈122.4 km〉

1位	ULISSI Diego	(ITA)	3時間08分50
2位	OSTERGAARD Niki	(DEN)	3時間08分59
3位	GALLOPIN Tony	(FRA)	3時間08分59
107位	畠田 誠(川越工業高)		3時間21分40
120位	内間 康平(北中城高)		3時間29分41

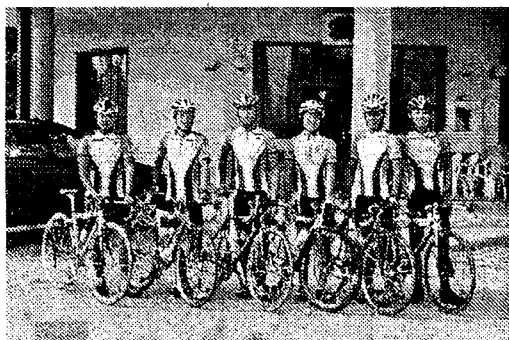
2006ジロ・デ・バジリカータ報告書

強化委員 大野 直志

- 1 大会期間 平成18年9月15日(金)～9月17日(日)
- 2 場 所 イタリア・バジリカータ州・ポテンツァ
- 3 選手団 監督 大野 直志 (青森・八戸工業高校)
コーチ 班目 真紀夫 (福島・東白川農商高校)
メカ 中島 康仁 (メカニック・通訳)

選手 青柳 憲輝 (栃木・作新学院3年)
伊丹 健治 (群馬・前橋育英高校3年)
吉田 隼人 (奈良・榛生昇陽2年)
石田 正樹 (青森・八戸工業高校3年)
入部 正太朗 (奈良・榛生昇陽高校2年)
中田 匠 (岩手・紫波総合高校2年)

4 レース報告



レースが行われた地域は、イタリアのナポリから南東150kmに位置するバジリカータ州ポテンツァ周辺でレースは実施された。標高の高い地域(700m前後)で朝夕の冷え込みが強かったが、日中は気温が上昇し、トレーニングも予定通りこなすことが出来た。

9月15日(金)第1ステージ【Tursi～Viggiano】 距離96Km 平均37.410Km

第1ステージはTursiからViggianoまでの96kmで19チーム104人が出走した。レースは序盤はあまり動きがなかったが、最初の上りにはいると集団がばらけた。下りに入ると中田(紫波総合)が落車してしまう。機材にトラブルはなく、ケガも擦過傷だけであったので残りの30kmを必死で走る。二つ目の上りがは集団に大きな変化がなくクリアし、チームカーも残り20kmと地点でキャラバンに復帰する。最後まで集団を抜け出す選手がなく、最後の急勾配のゴールを迎えるが、ゴールスプリントでは全員中段から前に出られず、伊丹健治(前橋育英)19位、青柳憲輝(作新学院)25位、吉田隼人(榛生昇陽)47位、入部正朗(榛生昇陽)48位、石田正樹(八戸工業)49位、中田匠(紫波総合)76位、チーム総合9位となる。

9月16日(土)第2ステージ【Montemurro～BaragianoScalo】距離110Km平均41.748Km



第2ステージはMontemurroからBaragiano Scaloまでの110kmで、起伏が激しいコースで序盤の下りで青柳が落車する。車輪に問題がなく、すぐに集団を追って走り始めるが差は開くばかりであったが、次の峠で石田が集団から遅れ、後方から追いついてきた青柳と二人でゴールを目指す。この日のレースは高低差が激しく中盤以降になると脱落する選手が多く見られた。残りの日本選手は中段のポジションをキープしていたが、峠の下りコーナーで中田が落車してしまい、腰にダメージを受けリタイヤしてしまう。後半にはいると5人の先頭集団が形成されメイン集団との距離を徐々に広げていくが、伊丹が最後の峠でアタックをかけ、これに反応した2名が加わり3名で先頭集団を追いかける。このアタックによって先頭との差を大きく挽回したが追いつくまでには至らず、24秒遅れでゴールして8位に入る。しかし総合成績は前日の19位から6位に上昇した。

9月17日(日)第3ステージ【Potenza～PalazzoS.Gervasio】距離103Km平均39.978Km



第3ステージはPotenzaからPalazzo S.Gervasioまでの103Kmで行われ、前日から雨が降っていたが、スタートが近くなると雨は上がり、路面が濡れている状態でスタートした。天気は回復したが路面の乾きが遅く、滑りやすい状態が続いた。前半の下りで、入部、石田の2名が落車して遅れてしまう。集団に追いつこうと懸命に追うが、濡れた路面の為、思うようにペースを上げられず大きく遅れてしまう。レースは序盤からロシア人が単独で逃げ、集団との差を1分前後で進行していく。中盤は目立った動きがなく伊丹、青柳、吉田の3人は集団の中段でチャンスをうかがい、補給の為にチームカーを呼び、補給のボトルを交換する。走行中の補給はなかなかチャンスがなく、動きのない部分を上手く見つけて補給した。終盤に入ると、集団のペースが上がり単独で逃げていたロシアの選手が捕まる。個人総合で差を詰めた伊丹は最後の峠で逃げを試みるが、逃げは決まらず大集団でのゴールスプリントになり総合6位で三日間の大会は終了した。

所感

今回参加した選手で海外レースを一度経験している選手は、経験が生かされレースでの動きがよかったが、初めて海外レースに参加した選手は、経験がなかったので細かな対処が出来ず、落車などのトラブルが発生したが、日本の環境と大きく違う状況の中で走った選手にとって、3日間のステージレース「ジロ・デ・バジリカータ」で得た経験は大きな自信につながったので、今後のレースでの活躍を期待する。

競技成績

第1ステージ 《区間成績》

【19位】	伊丹 健治	JPN	(2:34'42+44)
【25位】	青柳 憲輝	JPN	(2:34'51+53)
【47位】	吉田 隼人	JPN	(2:35'43+1'45)
【48位】	入部正太朗	JPN	(2:35'44+1'46)
【49位】	石田 正樹	JPN	(2:35'45+1'47)
【76位】	中田 匠	JPN	(2:41'26+7'28)

第2ステージ 《区間成績》

【 8位】	伊丹 健治	JPN	(2:18'22+24)
【20位】	吉田 隼人	JPN	(2:19'04+1'06)
【28位】	入部正太朗	JPN	(2:19'05+1'07)
【71位】	石田 正樹	JPN	(2:27'44+9'46)
【77位】	青柳 憲輝	JPN	(2:30'08+12'10)

【NON ARRIVATI】 中田 匠 JPN

第3ステージ 《区間成績》

【13位】	伊丹 健治	JPN	(2:34'37+2)
【28位】	吉田 隼人	JPN	(2:34'52+17)
【30位】	青柳 憲輝	JPN	(2:34'52+17)
【59位】	入部正太朗	JPN	(2:43'30+8'55)
【80位】	石田 正樹	JPN	(2:47'58+13'23)

《個人総合成績》 Totale 距離 295.000Km 平均速度 39.637Km

【 6位】	伊丹 健治	JPN	(7:27'41+1'08)
【24位】	吉田 隼人	JPN	(7:29'39+3'06)
【51位】	入部正太朗	JPN	(7:38'19+11'46)
【54位】	青柳 憲輝	JPN	(7:39'51+13'18)
【72位】	石田 正樹	JPN	(7:51'27+24'54)

チーム総合 5位(22:26'08+2'32)